

発行所

静岡県高等学校障害児学校教職員組合
静岡市葵区駿府町1-12
高教組新聞編集委員会
http://www.s-koukyousho.jp/
e-Mail info@s-koukyousho.jp
TEL (054) 254-6900
FAX (054) 254-0814
Facebook:「静岡高教組」で検索

第477号
2022年
5月21日

高教組しんぶんは組合費とカンパによって発行されており、
全教職員に配布しています

あなたも高教組へ

2面・レシャード・カレドさん講演会



しずおか

高教組しんぶん

主張

青年劇場による「あの夏の絵」が各地で上演される。広島市立基町高校の生徒が、被爆者から証言を聞き、「原爆の絵」を描く活動を主題にしたものだ。

学ぶことの意味を考えさせられる「あの夏の絵」

3年ほど前にNHKでも、一人の高校生の10か月を追った様子を放送した。はじめは遺体について語れなかった被爆者が、次第に白い幽霊のような行列を見た記憶を証言できるようになり、黒焦げになった父親やハエとウジがたかる様子を語るようになる。そして今回、黒焦げの遺体の横を通り過ぎる人の心を



から「説明がない」とわかっていないなどと酷評される。原爆資料館を訪問

年公開された映画「ひろしま」を観る。「シヨクで寝込んだ。街で迷子になり、何も知らずに楽しそうにしている人たちの様子を見て、このままでは忘れ去られてしまう、描かねばと使命感を感じた。でも怖い、円形脱毛症になりそう」「今まではこんなものかなと妥協していた。そんな自分を思いっきり殴りつけてやりたい」

結局目を髪で隠すことにする。隠した方が心の荒廃を想像できる、と。避難する人たちの絵は、恋人からももらったハンカチを握りしめる人など、ひとりひとりの日常を想像して描いた。「言葉だけで通じない、心に響くこと伝えることができる」と語り、人を気遣うことができるようになったと自身の成長も

し方、問題への対処の仕方、社会へのかかわり方を変えようとする。ましてや他から評価され、自分の利益のため学びでは、自分の商品価値を値踏みされる存在にしかたない。学びによる変容と成長を、自らの体験として語り、生き様として示す役割の自覚、教師にも問われている。

来賓あいさつでも、侵

末が各校40〜80台配備されていますが、各校の3分の1、1学年分に相当する1万2千台を追加すると明らかにしました。

また、再審・無罪を求めている袴田巖さんの姉・秀子さんも登壇し、支援を訴えました。

また、再審・無罪を求めている袴田巖さんの姉・秀子さんも登壇し、支援を訴えました。

実効性ある多忙解消策を春闘教育長交渉



4月28日に行なわれた春闘教育長交渉に、高教組からは9名が参加し、県教育委員会は新たに就任した池上重弘教育長、教育部長、教育監、参事、担当課長等が交渉に応じました。

冒頭、深田委員長は不祥問題の因として、県知事が「ストレス」に、教育長が「多忙」に言及したことを取り上げ、年度当初の最も忙しい時期に、「不祥事研修」を押し付けるのではなく、実効性ある多忙解消策を求めました。

この4月から導入される人事評価結果の「昇給への活用」に関しては、十分な検証と弊害が生じた場合の見直しを要求。教育長は、「高めあい助け合う教職員集団」を

「人事委員会の勧告尊重、国や他の都道府県の動向を注視し、適切に対応」という従来通りの回答でした。

昨年、人事委員会は、月例給の据え置き・一時金の引き下げ勧告を行いました。私たちが求めているのは、コロナ禍での奮闘に込める賃金です。

勤務時間管理システムの調査結果データを公開し、高教組と協議を行うこと、虚偽記録や管理職による「時短」強制をさせないことを要求。これに対し、長時間勤務解消に努め、休憩時間が確実にとれるよう、また上限時間を形式的に遵守するために虚偽記録や持ち帰りを促したりしないよう校長を指導すると回答しました。

しかし校長への指導だけでは解決するものではありません。データをもとに、高教組と対策を協議

求め、GIGAスクール構想に対する見解を質し

視座

とある小さな事業所であつた本場の話。あるベテラン社員、その事業所のこと

でも知っていて、所長からも同僚からも顧客からも頼られる存在。責任感も強く、その社員がいなければ仕事がまわりません。事業所がピンチになれば、サビビス残業も厭わず、夜遅くまで仕事を

して、みんなを助けるためにがんばります▼事業所長は、その社員に感謝します。その社員は、自分がいなくなったら事業所が窮地に陥ることが明らかなので、自分の仕事にやりがいを感じていました。さらには、自分が

ますます負担が増えていきました。どうやら事業所長は、その社員のサビビス残業のおかげで、新たに社員を雇用しなくてもいいことにも感謝していたようです▼がんばる社員は模範とされます。しかし、少し困ったことがサビビス残業することが当然となつてしまったのです。その社員ががんばれば反感も買ったことでしょう。サビビス残業を強いることは、正当な賃金を支払わないことですから、実は違法行為。その違法行為がなくなるとは、事業所が成り立たないとはおかしな話です▼ついに、その社員は、無理がたたって、体調を崩し、心の安定も失い、退職することになってしまいました。その後、その社員は転職に成功したようですが、その事業所がどうなったかは知りません▼教職員の残業なくして、学校が成り立たないのは事実です。「学校の常識は世間の非常識」、ちよつと立ち止まって、考える時期なのかもしれませぬ。

大事なことは関心をもつこと そして、私には何ができるのかを問うこと

レシャード・カレドさん



1979年 ソ連がアフガニスタンに侵攻
欧米がムジャヒディンを支援して武器供与
1989年 ソ連撤退、1991年崩壊。供与された武器で内戦
1996年 タリバンの政権。アル・カーイダの支援を受ける
2001年 9.11の同時多発テロ
ビンラディン引き渡しを拒否したため、アメリカがアフガン空爆開始
2011年 ビンラディンの死後、国際社会の関心低下。支援減少
2019年 中村哲氏、銃撃を受け死亡
2021年 米軍撤退、前政権崩壊、8月タリバン政権樹立

5月7日、藤枝地区交流センターで、「憲法に学ぶついで」を開催しました。島田で病院を開業するレシャード・カレドさんを招き、「アフガニスタンの現在 ―武力で平和はつくれない―」のお話を聴きました。約80人が参加しました。約47000円のカンパは、カレドさんの会に寄付しました。

レシャードさんはカンダハール出身。1969年19歳の時来日。千葉大留學生部を経て、京都大学医学部編入、76年卒業。医師免許を取り、82年から島田市民病院に8年間勤務。JICA(国際協力機構)の依頼で「結核対策プロジェクト」のチームリーダーとして約2年間イェメンに赴任。91年に帰国し、島根県松江赤十字病院に勤務し始めて2年後、島田から人々がバスを連ねてやってきて、「島田に戻ってきてください」と懇願されます。

1993年島田市に戻りレシャード医院を開業。老人保健施設など3か所の施設を開設。子どもの声や隣近所の声が聞こえる普段通りの生活ができる施設にしています。子どもの頃、核の患者に対して薬もない中、寄り添いながら励まし続けて元気にさせる医師の姿を見て、技術や薬によつ

て治すのではなく、心のつながり、信頼関係で安らぎや元気を与える仕事なのだと思ひ、医師をめざしたのだそうです。豊かで美しかったアフガニスタンシルクロードが通っていた豊かな美しい町があり、ヒンズクシ山脈の雪解け水で豊かな森林のある農業国でしたが、ソ連が森林を焼却伐採したため砂漠化。農地に大量の地雷を埋めたため、食料生産不能になってしまいました。

レシャードさんが難民キャンプに医療支援で行ったとき、雨のたまり水でおむつを洗っている8歳くらいの女の子に遭遇。なぜ汚い泥水で洗うのかと聞いて、けげんな顔。久しぶりに雨が降ったから洗っている、普段は砂ですついているという話に衝撃。何も知らなかった、自分には何ができるのかと、強烈に考えさせられたそうです。

中村哲さんとの交流1984年からバキスタンのペシャワールで医療支援をしてきた中村哲さんも89年からアフガニスタン国内へ活動を拡げ、ハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始。薬を飲ませているのに治らないの



医療支援をしてきた中村哲さんも89年からアフガニスタン国内へ活動を拡げ、ハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始。薬を飲ませているのに治らないの

食料難に陥り飢餓に襲われている人が1400万人、人口の半分以上。十分な食料を得られていない家庭が95%。年末まで命が持たないかもしれない心配される子どもが100万人、5人に1人。医療人材も不足、医師は日本の8分の1、看護師37分の1。カレドさんの会は「ヒンズクシ山脈を源流とする豊かな地下水脈」のこと。2002年から「医療と教育」を柱としたアフガニスタン復興支援を行なっている。「滴の水のように、小さくとも、やがて集まり、大地を潤す大きな流れとなる」と願う。「目立たないように」の思いも込めたそうです。

無償の支援を行なっていますが、患者数が増加、カンダハール診療所では1日150人近く、15歳以上の女性の受診が多い。家庭での出産が多いので、大量出血したり破傷風にかかりやすいので、BCG、ポリオと共に破傷風の予防接種を広めています。診療所での出産を勧めますが、夜の分娩が多く、365日、24時間体制で診療しているそうです。カレドさんの会は、2009年、ハジニカ学校を設立。

小学生480人用として作りましたが、中学生、高校生も通い続けて、今は1421人が通学。教師不足なので3交替制で授業を行なっているそうです。国際社会は今、何をすべきか

昨年8月のタリバン政権発足以来、再びテロの温床にならないようにと、国際社会は資金を凍結し、タリバン政権を承認せず、直接の支援を行なわないことにしています。しかし、現地で困難の中を生きている人々には、農業、教育、医療の支援が急務です。政治や経済の統治能力の欠けているタリバン政権に対しても、給与支払いができるよう支援指導し、信頼関係を作ることも必要です。それによつて人々を救うことができ

食料支援などするよう求めているのですが、「考えておきます」程度の回答アメリカ政府が認めないからか壁は厚い。今のところはNGOによる支援を拡大したいと模索中。関心をもつこと

ウクライナの様子はよくわかるが、アフガニスタンに関する情報が少なすぎるという声を聞きます。確かに、ウクライナの避難民には自衛隊機を出動させましたが、アフガニスタンの600万人の避難民には支援の手が届きません。マスコミも報道しない。白人ではないからか、タリバンがアメリカの言いなりではないからか。しかし、関心を持てば、情報を得ることはできます。昔の日本人は、「おかげさま」「お互い様」とお互いに関心を持ち、助け合ったが、最近では、隣の人が亡くなつても5日間気がつかない。日本は今、そのような恐ろしい状況になっているのではないかと。憲法9条の「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求」することが日本人の責務です。他人事と思わず、自らの責任として、国内外の問題に目を向け、関心をもつこと。そして、人任せではなく、私には何ができるのかを問い、貢献や支援に参加協力することが求められています。カレドさんの会、ペシャワールの会への支援をお願いしますと、お話しを締めくくりました。

クリニックでの診察状況



カレドさんの会カンダハール診療所 2021年12月4日撮影

アンソニーシャル デイスタンス

19歳で綿矢りさと共に芥川賞を受賞した金原ひとみ。彼女らの受賞は、出版社の商業主義が浸み出ている感じがしていた。しかし、その後も作品を発表し続け、私にとつて、今やもっとも注目する作家となった。今年、長編ミーツ・ザ・ワールド」を発表した。この作品もなかなかだが、それよりも昨年出版された「アンソニーシャル デイスタンス」という短編集が魅力的で、こちらを紹介したい。かなりふしだらな内容で教育関係の新聞に何となくのことかと言われるかもしれない。全部で5編の小説からなる。2編を紹介する。最初の「ストロング」。それは何気ない出版社の社員で女性3人の会話から始まる。セナという女性が彼氏の話を、つい3週間前に彼氏と別れた先輩の吉崎さんの前であつたらんと話す。ひやひやしているミナに対して、イケメンの彼氏について話してくる。ミナはイケメンしか眼中になく今の彼氏もイケメン。セナは「彼と結婚するんですか」と無邪気に聞



てくる。まあよくある話のような、ないような社員の雰囲気はリアルである。しかしである、食事が終わると、ミナは人でコンビニ行く。そしてチューハイのストロング・レモンを2缶買い、路地に入りハンカチで覆って一気に飲み干す場面が訪れ、読む者を驚かせる。イケメンの彼はバイトをしながらバンド活動をしている。彼女は付き合い始めて2年間「天にも昇る気持ちで毎日過ごしていた」。それが思いもかけないことから、彼が精神疾患に陥り、彼が担当していた家事や彼の介護を二人でこなし、生活がストレスフルとなってしまう。「ドブネズミ的憂鬱が襲う」のだ。2つ目は「デバツカ」。35歳になる愛菜(まな)は同僚の24歳の大山と付き合い始める。2人で水族館に行くシーンは清々しい。雰囲気は男が積極的で、愛菜は押されながらも躊躇する。が、結局「籠絡されていく」。すると、今度は愛菜は、若いビッチビッチした女性社員と自分の容姿を比べてしまう。それに対抗するために、ずるずるとあることにはまってしまふ。そんな小説である。(Y)